

Title	ポスト・ブルデュー社会学における行為者の過去をめぐる問題： ライールとボルタンスキーの検討を通じて
Sub Title	
Author	小田切, 祐詞(Odagiri, Yuji)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.82 (2016. ) ,p.163- 166
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2015年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000082-0163">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000082-0163</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ポスト・ブルデュー社会学における行為者の過去をめぐる問題

——ライールとボルタンスキーの検討を通じて——

小 田 切 祐 詞

## 1 はじめに

筆者は、本助成の成果の一部として、第88回日本社会学会で、「個別性の社会生成過程——ポスト・ブルデュー社会学の検討を通じて」という報告を行った。この報告の目的は、いかなる社会過程が個人を他者と取り替え不可能で、置き換え不可能な存在にするのかを考察することにあった。この目的を達成するために、筆者は、ピエール・ブルデュー以後のフランス社会学を代表するベルナル・ライールとリュック・ボルタンスキーの議論を検討した。その結果明らかになったのは、個人がかけがえのない存在となる社会過程として、次の二つを考えることができる点である。一つ目は、ベルナル・ライールが着目した「社会化」過程。もう一つは、ボルタンスキーが議論の俎上に載せた「生む」過程である。ライールは、分化した社会における社会化過程の多元化に、「社会的なものの個別的な襲」としての個人の個別性が形成される過程を見た。それに対して、ボルタンスキーは、男女の性的関係によって生じた存在が、中絶されるのではなく、家族として象徴的に迎え入れられる過程に、人間存在が個別化される契機を見た。

学会報告では、個別性の社会生成過程に対する両者のアプローチの違いが、ブルデュー社会学に対するどのような態度決定から導き出されたものなのかについて、十分に論じることができなかった。この点について検討することが、本稿の目的である。以下の内容は、現在準備中の論文の素描である。

## 2 ボルタンスキーから見たハビトゥス概念

よく知られているように、ボルタンスキーはもともとブルデューのもとで研究活動を行っていたが、ある時期を境に彼はブルデュー社会学から距離をとるようになる。その原因はいくつか考えられるが、ライールとの関係を考える上で重要なのは、彼のハビトゥス概念解釈である。

ボルタンスキーは、ハビトゥス概念に一定の評価を与えながら<sup>1</sup>、その限界も指摘している。それをボルタンスキーは、「ハビトゥスの強い使用」と「ハビトゥスの弱い使用」という形で表現している。

一方で、強い意味で理解されると、ハビトゥスは、行為者が状況の中で直面する不確実性を吸収してしまう。このことは、行為や論争の問題を解消してしまう傾向をもつ。この点に関して、ボルタンスキーは次のように述べている。

行為という概念が意味を持つのは、不確実性を背景とする場合のみ、少なくとも、複数の可能な選択肢を参照できる場合のみである。全てがあらかじめ決着がついているように見える文脈においては、他ならぬ行為という概念は、その意味をなくす傾向がある。このことは何よりもまず論争に当てはまる。というのも、論争は、その成行きだけでなく、様々な論争相手が引き合いに出す事実や解釈も不確実であることを、主な特徴としているからである (Boltanski 2009: 44)。

このように、不確実性を特徴とする状況を犠牲にしてまでハビトゥス概念が強く使用されると、分析者は、「異なる状況にいる行為者が、ハビトゥスに書き込まれている諸図式を活性化することによって行動したこと、すなわち、ある意味で、予見可能なやり方で行動したことを示すことができたときに、自分の仕事をやり遂げたと考える」(Boltanski 2003: 159-160) ようになってしまうとボルタンスキーは述べる。

他方で、弱く使用されると、ハビトゥス概念は姿を変えて、エイブラム・カーディナーの「社会的パーソナリティ」や「基礎的パーソナリティ」といった、社会心理学や精神分析ですでに用いられている他の概念の方向に向かってしまう。このことは、ハビトゥスのもつ意味論的力を弱めることにつながる。

以上の検討から、ボルタンスキーは、他の革新的な概念と同じように、古い問題を解決したのと同じくらい新しい問題をもたらしたことに、ハビトゥス概念の社会学に対する重要性を見ている。ボルタンスキーがハビトゥス概念に見て取った新しい問題とは、例えば次のような問いである。

異なる経験の文脈の中で社会化が行われたが、それにもかかわらず、「ハビトゥスから自然に生じる合意」を引き合いに出すことなく歩み寄りの場を見つけることができる複数の人物の間の連携を、どのように考えることができるのか (Boltanski 2003: 160)。

このような問いが一因となって、ボルタンスキーは、ハビトゥス概念から距離を取り、正当な合意を目指して批判と正当化が展開される論争の分析へと向かった。その成果は、1991年に、ローラン・テヴノーとの共著『正当化の理論』(Boltanski et Thévenot 1991=2007) という形で提示される。

だが、ハビトゥス概念を捨ててしまうことで、ボルタンスキー社会学は、ある難題を抱え込んでしまうことになる。この点を的確に指摘しているのが、ボルタンスキーよりも二回り近く若いライールである。

### 3 ライールによるボルタンスキー批判

1963年生まれのライールは、自著『複数の人間』(Lahire 1998=2013) のねらいを、行為論における性向主義への「批判的回帰」(Lahire 2002: 10) と表現している。この場合の性向主義とは、「社会的実践や行動の分析において、個人的行為者の身体化された過去を考慮に入れようとするものである」(Lahire 2002: 10)。

性向主義と対比されるアプローチを、ライールは、「『過去のない』行為者の社会学」(Lahire 2002: 10) と形容する。それは、行為には興味を示すものの、行為者には、たとえその行為者のもつ歴史がどのようなものであれ、興味をほとんど示さない社会学とされる。「このとき我々が関わっているのは、あらゆる社会化論や記憶論、習慣論や身体化された過去の理論が取り除かれた社会学である」(Lahire 2002: 10)。

過去のない行為者の社会学の具体例として、ライールは、アーヴィング・ゴフマン、レイモン・ブードン、ノルベルト・エリアスの社会学を挙げる。たとえば、ゴフマンの社会学は、相互行為秩序を描き出してはくれるものの、行為者の過去の社会化に言及する必要は必ずしもない社会学であるとされる (Lahire 2002: 10)。

ライールは、ボルタンスキー社会学を、「過去のない行為者の社会学」の最新版として位置づける。彼は、ボルタンスキー社会学が性向主義的説明を捨てていることを、ボルタンスキーの1990年の著作『能力としての愛と正義』から次の二つの箇所を引用することによって、裏づけようとする。ボルタンスキー社会学は、「行為主体にいったん刻み込まれたら、その行為主体のいる状況 (situation) がどのようなものであれ、彼の行為を方向づける諸決定を明るみに出すことを目的とするものではない」(Boltanski 1990: 65)。「我々は、行為主体や彼の身体的習慣の中に不可逆的に刻み込まれており、あらゆる偶然的状況 (circonstances) において彼の行動を決定するであろう諸特性を再び捉えることを……自らの仕事にしていない」(Boltanski 1990: 69)。

ライールがボルタンスキーを批判するのは、ボルタンスキーが性向という行為者の身体化された過去に言及せず、「能力 (compétence)」概念に訴えた点についてである。「この著者 (=ボルタンスキー) は、ためらいなく『能力』概念に訴え、彼の語る能力を自然化し、またたく間にその獲得や社会生成の問題を片付けてしまう」(Lahire 2002: 11)。たとえば、『正当化の理論』は、上述したように行為者が批判や正当化を行なう論争を主要な分析対象とした作品だが、ライールからすれば、ボルタンスキーはこの本の中で、行為者が「自分の思うように行為する (批判する、正当化する……) よう彼らを導くこれらの能力をどのようにして構築したのか」(Lahire 2002: 11) については問うていないままなのである。

ライールがなぜ『複数の人間』のねらいを性向主義への「批判的回帰」と表現したのか、今やその理由は明白だろう。つまり、一度はボルタンスキー社会学の登場によって遠ざけられた性向概念に、ブルデュー社会学の批判的継承という形で回帰していくことを、ライールは意図したのである。

#### 4 生む過程へ

ライールが2002年の著作で展開した「過去のない行為者の社会学」という批判にボルタンスキーがその後直接応答している文献は、管見の及ぶ限り見当たらない。だが、個別性が社会的に構築される過程を「生む」過程に見出そうとした彼の2004年の著作『胎児の条件』(Boltanski 2004) は、間接的ではあるにせよ、ライールに対する一つの応答になっているように思われる。なぜなら、生む過程とは、個別的な行為者の社会的構築過程を説明する、ある意味で社会化よりも過去の過程だからである。ボルタンスキーは次のように述べている。

生むという行為、すなわち、新たな人間存在が社会的世界に到来することに責任を負う行為を対象とすることによってこそ、個別化の過程に接近するための道を見つけられることができると私は考えている。このことは、社会学の仕事は社会化や初期教育の研究とともに始まるという考えを放棄することを前提とする。この考えにおいて、新生児はあたかも、もっぱら社会によって社会化されるものとして生物の論理 (biologie) が社会にもたらす、社会的に無定形な存在であるかのように扱われる。だが、このようなアプローチは放棄される必要がある。というのも、私の考えでは、人間存在の個別化は、確かに社会化のさまざまな瞬間で続けられるであろうが、それが始まるのは、受胎から妊娠と誕生を経て、ある社会集団への統合へと至る、連続する過程においてだからである。このような妊娠期間は、(つい最近まで社会学による研究の蓄積が比較的少なかったけれども) 特に重要な段階なのである (Boltanski 2004: 49)。

## 5 おわりに

本稿の目的は、ライールとボルタンスキーに見られる、個別性の社会生成過程に対するアプローチの違いが何に由来するのかを明らかにすることであった。これまでの分析から明らかになったのは、ハビトゥス概念に対するそれぞれの態度決定が、重要な役割を果たしているという点である。

個別性の社会生成過程を社会化過程に見出そうとするライールの視点は、彼の言う「性向主義への批判的回帰」から導き出されたものだと言える。

ハビトゥス概念から距離を置いたボルタンスキー社会学は、この概念からこぼれ落ちる論争と合意の問題を主題化することには成功したものの、その代償として、行為者の過去を捨象し、能力を自然化する傾向があった。ライールの「過去のない行為者の社会学」という批判は、この点を突いたものである。その後のボルタンスキーの生む過程への着目は、こうした性向主義からの批判への応答として解釈することができる。

以上のように、個別性の社会生成過程への視座に関するライールとボルタンスキーの対立は、ポスト・ブルデューの位置取りの違い、すなわち、ブルデュー社会学の批判的継承とブルデュー社会学との距離化を示している。だが、両者の対立の意味はこれだけに尽きるわけではない。「行為者の過去」を考える上でも、彼らの対立は有益な視座を提供してくれているように思われる。つまり、行為者の過去は、生まれてから現在に至るまでの期間を指すのか、それとも、生まれる前の期間にまで延長されるべきなのか、こういった問いを彼らの対立は示唆しているのである。

学会報告と本稿は、個別性の社会生成や行為者の過去という問題を、ポスト・ブルデューという狭い文脈の中で検討してきたが、この問題を社会学史全般との関連で検討していくことを、今後の課題としたい。

### 註

- <sup>1)</sup> ボルタンスキーは、ハビトゥス概念の有効性を、「文化の場所」の問題に一定の貢献を果たした点に見出している (Boltanski 2003)。

### 参考文献

- Boltanski, Luc, 1990, *L'Amour et la justice comme compétences: Trois essais de sociologie de l'action*, Paris: Métailié.  
 ———, 2003, "Usages faibles, usages forts de l'habitus," in Encrevé, P., Lagrave, R.-M. (dir.), *Travailler avec Bourdieu*, Paris, Flammarion, 153-164.  
 ———, 2004, *La condition foetale: une sociologie de l'avortement et de l'engendrement*, Paris: Gallimard.  
 ———, 2009, *De la critique: Précis de sociologie de l'émancipation*, Paris: Gallimard.  
 Boltanski, Luc et Laurent Thévenot, 1991, *De la justification: Les économies de la grandeur*, Paris: Gallimard. (= 2007, 三浦直希訳『正当化の理論——偉大さのエコノミー』新曜社.)  
 Lahire, Bernard, 1998, *L'homme pluriel. Les ressorts de l'action*, Paris: Nathan. (=2013, 鈴木智之訳『複数の人間——行為のさまざまな原動力』法政大学出版局.)  
 ———, 2002, *Portraits sociologiques: Dispositions et variations individuelles*, Paris: Nathan.